

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

平成27年度病虫害発生予報第7号(10月)について

このことについて、病虫害発生予報第7号を発表したので送付します。

予報第7号

秋期防除と落葉処理でナシ黒星病の発生予防に努めましょう！

本年は、黒星病が多発しました。この黒星病菌は秋期に感染した芽基部鱗片や落葉で越冬し、翌年の感染源となりますので、以下の点に留意し、越冬菌密度を減らしましょう。

①秋期は、芽鱗片組織が露出するので黒星病菌に感染しやすくなります。この時期(下段の写真、目安は平坦部で10月中旬～11月上旬頃)に保護殺菌剤を2～3回散布しましょう。

②落葉上の子のう胞子は第1次伝染源となります。落葉は集めて園外に持ち出すか、又は埋没する等適切な処理を行いましょう。



葉に発生した黒星病秋型病斑
(秋型病斑の中に黒星病菌の子のう胞子が形成される)



感染しにくいステージ
(芽鱗片の組織は露出していない)



感染しやすいステージ
(芽鱗片の組織が露出(緑色の部分)している)

図 ナシの秋型病斑と秋期の芽基部の状況

10月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

主な病害虫の発生予報概要

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (10月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
大豆	吸実性カメムシ類	やや少	やや少	やや多
カンキツ	ミカンハダニ	少	少	少
カキ	炭疽病	やや多	やや多	多
果樹共通	チャバネアオカメムシ	少	—	少
冬春イチゴ	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類	並 並 並	並 並 やや多	並 やや多 やや多

*果樹共通・チャバネアオカメムシの平年比について、現況は年次変動が大きいいため前年比としている

<予想される向こう1か月の天候（平成27年10月3日～平成27年11月2日）>

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並、日照時間は平年並か多いでしょう。

週別の気温は、1～2週目は平年並、3～4週目は平年並か高いでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低20 並40 高40% 平年並か高い見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並の見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み

(福岡管区气象台 平成27年10月1日発表抜粋)

作物別発生予報

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、

「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

それぞれの条件は、**少発生（－）**、**やや少発生（－～±）**、**並発生（±）**、**やや多発生（±～＋）**、**多発生（＋）**として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。

【普通作物：大豆】

1 吸実性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

主要3種カメムシ（アオカメムシ、イモジカメムシ、ホソカメムシ）

25株当たり払い落とし虫数 0.6頭（平年 0.9頭、前年 0.1頭）

発生ほ場率

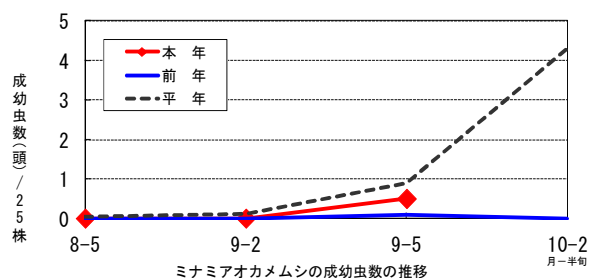
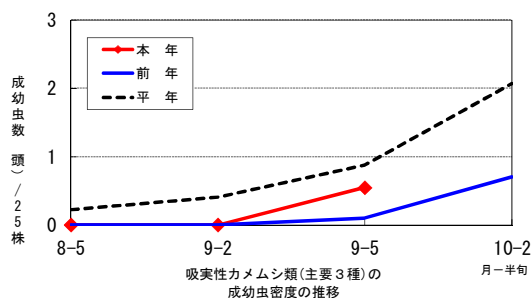
18.2%（平年 29.5%、前年 10.0%）

ミナミアオカメムシ

25株当たり払い落とし虫数 0.6頭（平年 0.9頭、前年 0.1頭）

発生ほ場率 18.2% (平年 17.2%、前年 10.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 吸実性カメムシ類の加害は収穫期まで続くので、必ずほ場での発生状況の把握に努め、発生が多い場合は防除を行う。
- イ 薬剤散布を行う場合には、薬剤が着莢部によくかかるように丁寧に散布する。
なお、カメムシ類は広範囲に移動するので、広域一斉防除の効果が高い。
- ウ 10月に発生量が急増する場合があるので、発生状況には十分注意する。
- エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 8の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。

【果樹：かんきつ】

1 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

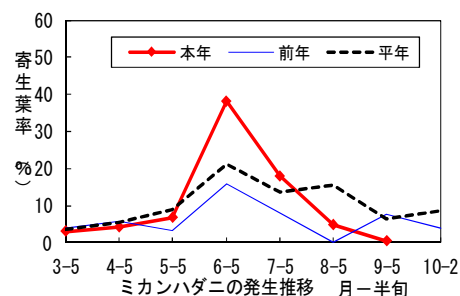
(2) 予報の根拠

- ア 9月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。
寄生葉率 0.5% (平年 6.5%、前年 7.7%)
発生ほ場率 27.3% (平年 45.4%、前年 63.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 果実に寄生が認められる場合は、薬剤防除を実施する。
- イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 8の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

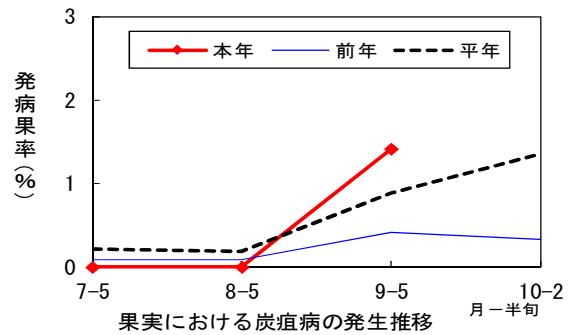
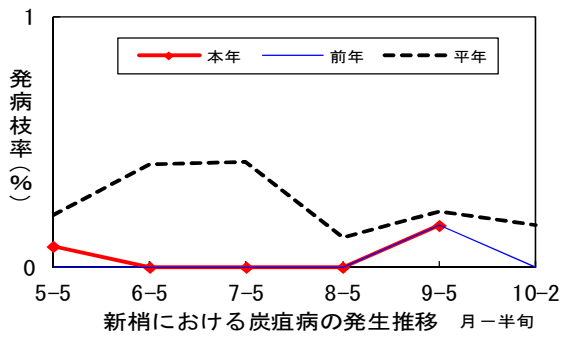
(2) 予報の根拠

- ア 9月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±~+)。
発病枝率 0.2% (平年 0.2%、前年 0.2%)
発生ほ場率 16.7% (平年 12.3%、前年 8.3%)
発病果率 1.4% (平年 0.9%、前年 0.4%)
発生ほ場率 50.0% (平年 36.6%、前年 33.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源である罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。
- イ 連続降雨や前年の発生が多かった園では、薬剤防除を徹底する。



【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

(1) 予報の内容

発生量：前年・前々年より少

(2) 予報の根拠

ア チャバネアオカメムシの1㎡当たりの越冬量は平均0.9頭（前年4.8頭、前々年0.7頭）で、前年より少なかった（－）。

チャバネアオカメムシの越冬量およびヒノキ球果着生量の年次推移

	平成27年	平成26年	平成25年
越冬量(頭/㎡)	0.9	4.8	0.7
ヒノキ球果着生量	やや少	中	中

イ 9月1半月～4半月までのフェロモントラップでのチャバネアオカメムシの誘殺数は、前年より少なかった（－）。

誘殺数： 5頭（前年 237頭、前々年 292頭）（調査地点：筑紫野市）

ウ 9月1半月～4半月までの予察灯でのチャバネアオカメムシの誘殺数は、前年より少なかった（－）。

誘殺数： 84頭（前年 916頭、前々年23,942頭）（調査地点：筑紫野市）

307頭（前年 471頭、前々年 6,292頭）（調査地点：八女市）

エ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 園内の発生状況の把握に努め、適期防除を行う。

イ カメムシ類は、夜行性であるが夜温が低下すると昼間も移動し果実を吸汁加害するので、昼間の果樹園への飛来にも注意する。

イ 最新の果樹カメムシ類の発生状況は、病虫害防除所のホームページを参照する。

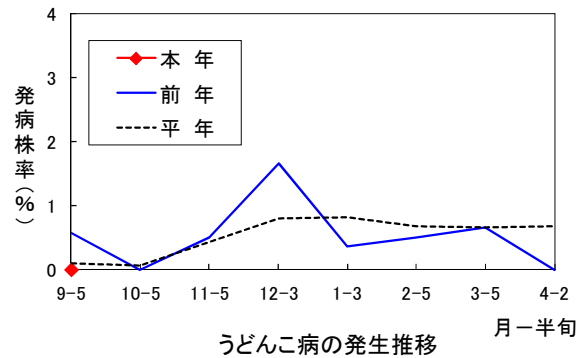
【果樹：その他の病虫害】

作物名 病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (10月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かき フジコナ カイガラムシ	多	多	並	現在、フジコナカイガラムシの第3世代の齢期は揃っていないが、農薬散布を行う場合は園内を見回り、できるだけふ化幼虫の比率が高い時期に行う。

【野菜：冬春イチゴ】

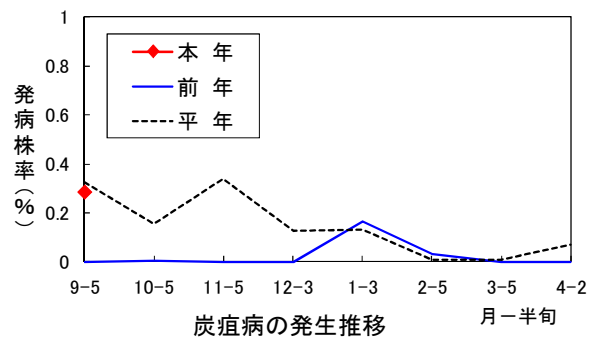
1 うどんこ病

- (1) 予報の内容
発生量：平年・前年並
- (2) 予報の根拠
ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
発病株率 0% (平年 0.1%、前年 0.6%)
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。
- (3) 防除上注意すべき事項
ア 不要な下葉は早めに除去する。防除は下葉かぎ後に行うと効果的で、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。
イ 9～11月は発生が増加しやすい時期なので、定植後からビニル被覆までの時期を重点的に防除を行う。薬剤については、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 8の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



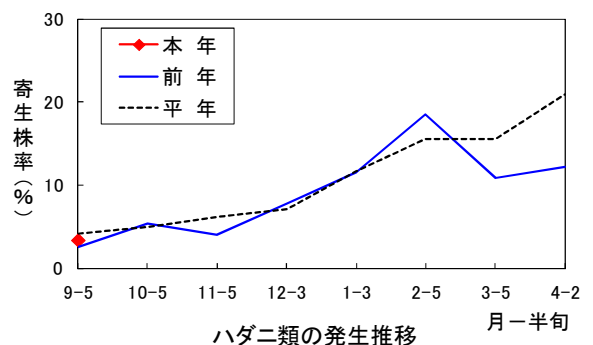
2 炭疽病

- (1) 予報の内容
発生量：平年並、前年よりやや多
- (2) 予報の根拠
ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
発病株率 0.3% (平年 0.3%、前年 0%)
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。
- (3) 防除上注意すべき事項
ア 発病株は、残渣を残さずに周囲の土ごと掘り取り、速やかにほ場外に持ち出し処分する。
イ ハウス内の排水を図り、多湿にならないようにする。



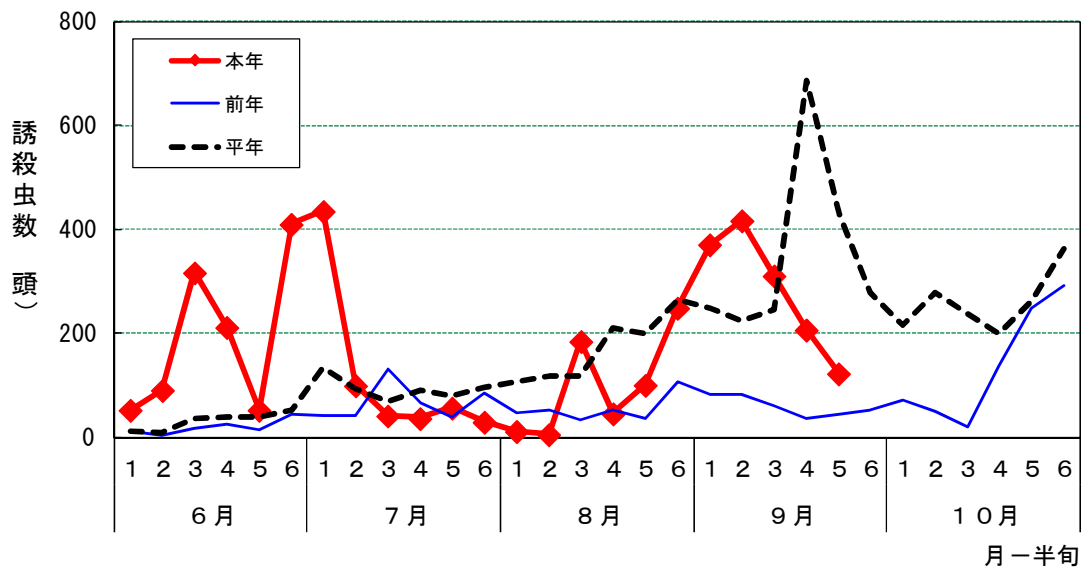
3 ハダニ類

- (1) 予報の内容
発生量：平年・前年よりやや多
- (2) 予報の根拠
ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
寄生株率 3.4% (平年 4.1%、前年 2.6%)
イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。
- (3) 防除上注意すべき事項
ア ハウス内外の除草を徹底し、本虫の増殖源を絶つ。除草した雑草や摘葉した葉はハウス内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し処分する。
イ ビニル被覆後に多発しやすいので、被覆までの防除を徹底し、初期密度を低下させる。
ウ 各種薬剤の感受性が低下しており、多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。なお、防除は摘葉後に行うと効果的である。
エ 同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
オ ビニル被覆後に天敵を利用する場合は、天敵への影響が大きい有機リン系、カーバメイト系、合成ピレスロイド系、ピラゾール系の薬剤は使用しない。

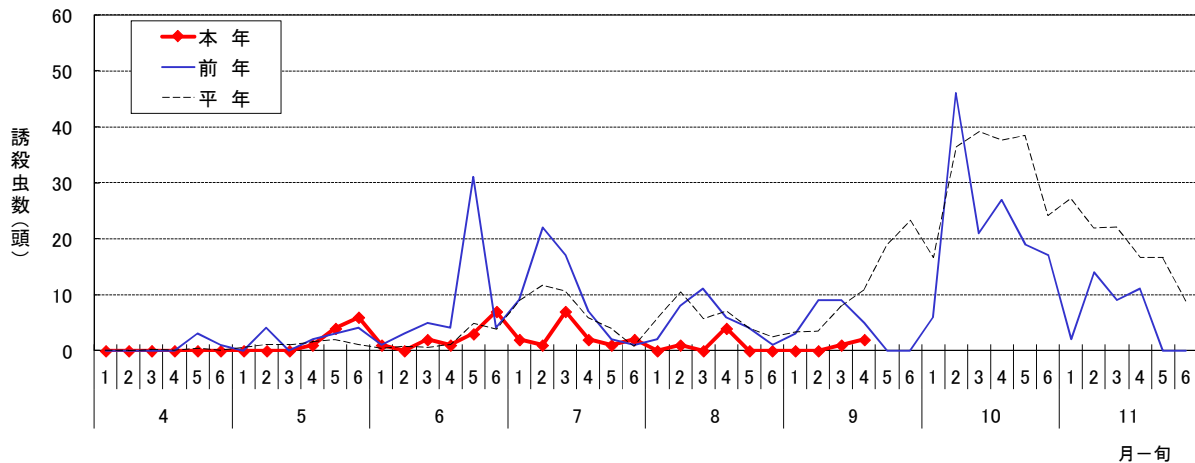


【野菜：その他の病害虫】

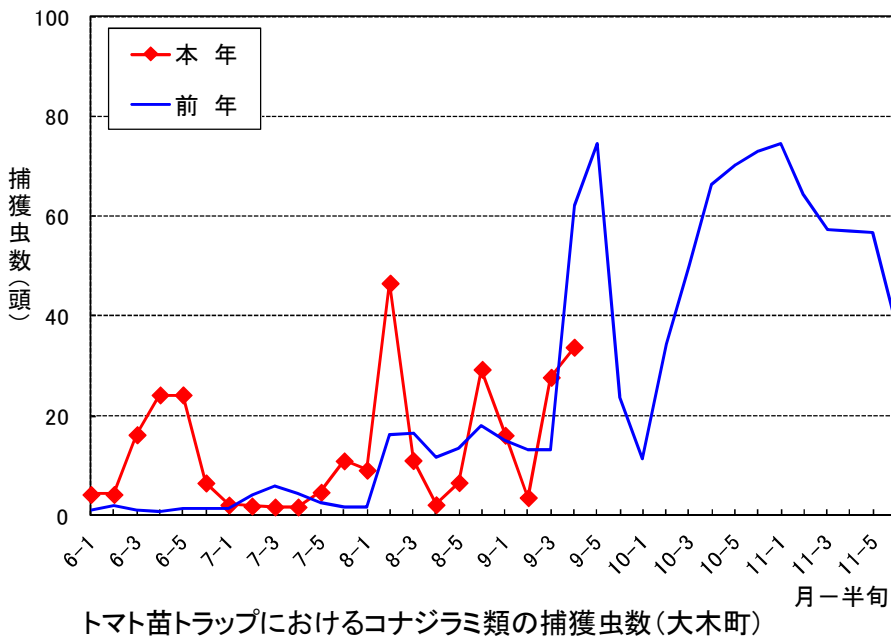
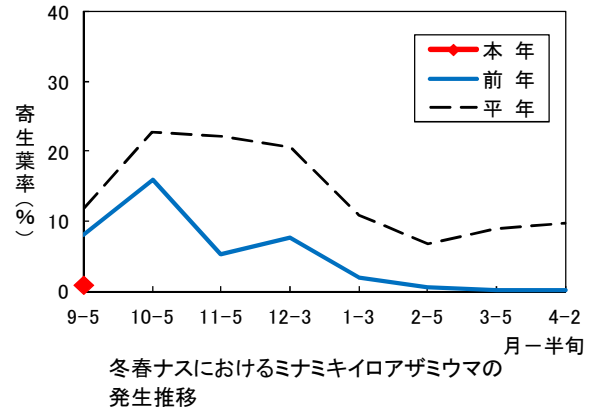
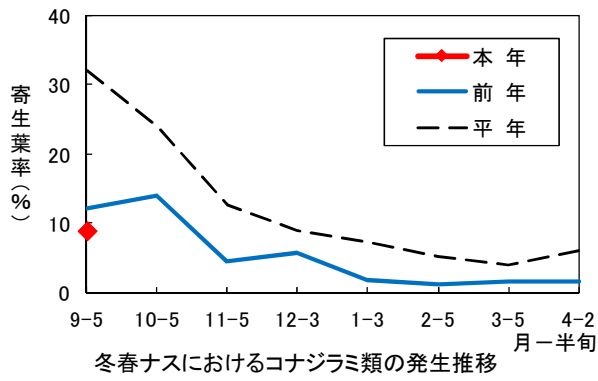
作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (10月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
野菜共通				
ハスモンヨトウ	少	やや少	並	<ul style="list-style-type: none"> ・若齢幼虫は群生しているため、かすり状の葉を見つけ次第、除去・処分する。 ・今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照のこと（以下の害虫についても同様）。 ・薬剤防除は、孵化直後の幼虫を対象に実施する。 ・早期発見に努め、初期発生のうちに防除を徹底する。 ・ほ場内外の除草を徹底し、本種の増殖源を絶つ。 ・防虫ネット（0.4mm目合い以下）を展張し、定期的な薬剤散布を実施する。
オオタバコガ	やや少	並	並	
コナジラミ類	少	やや少	並	
ミナミキイロアザミウマ	少	やや少	やや少	



フェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺虫数 (筑紫野市)



フェロモントラップにおけるオオタバコガの誘殺虫数 (大刀洗町)



※昨年からの調査なので、平年値はなし。

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しました。
携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。



福岡県病害虫防除所